

英語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3 2/4 2/5 共通仕様	第1問	空所補充問題(文法・語法, 熟語)	標準
	第2問	整序英作文問題(文法・語法, 熟語)	標準
	第3問	対話文完成問題	標準
	第4問	会話文および広告読解問題	標準
	第5問	長文読解問題	標準
	第6問	長文読解問題	標準

●出題形式

椋山女学園大学の入試は、3日程から試験日を選ぶことができ、しかも最大3日程すべて受験可能で、解答形式はすべてマークシート方式である。試験時間は60分で得意教科で受験可能な2教科型、募集人員の多いメイン入試である3教科型の2つの入試方式がある。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ(リスニングを課さない)

b. 出題内容(大問構成)

文法・語法空所補充問題1題、整序英作文問題1題、短めの対話文完成問題1題、長めの会話文読解問題と広告読解問題によって構成された大問が1題、長文読解問題2題の計6題(小問数は40問に統一)

●問題の傾向

第1問は、単文中の空所に適切な語句を補充する形式である。主に高等学校で習得すべき単語・表現や文法事項が出題されている。一部口語で使われる表現も見られるが、既習事項を活用すれば正解を導くことができるだろう。第2問は整序英作文問題で、5つの選択肢を適切な順序に並べかえる形式である。日本語訳がないため、意味内容に頼って演習を進めてきた受験生にとっては難しく感じるかもしれないが、第1問同様、高等学校までの既習事項、特に文法・語法を活用することによって正解を導くことができる。第3問は、2人の話者による1～1.5往復の対話内の空所を補う形式である。受験英語では珍しい生きた口語表現が散見されるが、対話の趣旨をつかみ、直前の発話に対して適切な返答を予測しながら読み進めることで正解を導くことができる。第4問は、長めの会話文読解問題と、英語で書かれた広告などを題材とした問題の2つの形式で構成されている。会話文読解問題は、概ね文章中の空所への適切な表現の補充、下線部が意図している意味内容に類する表現の選択、文章の内容に関する問いへの回答を選ぶ問題などで構成されている。それぞれの選択肢は既習事項ばかりだが、教科書やそれに付随する問題演習ではあまり見かけない口語表現が文章中に散見されるため、解答の根拠となる箇所の解釈に戸惑ってしまうこともあるだろう。そのため、前後関係や会話の流れをしっかりと把握し、適切に文脈判断を行う必要がある。広告読解問題で使用されている資料では、正解を判断する情報が比較的多めの文字情報の中に多く潜んでおり、内容と一致しない選択肢を答える設問もあるため、注意しながら解き進める必要がある。解答の際の混乱を避けるためにも、メモを取りながら読解を進めたほうがよいが、その分の時間も要することも忘れずにいてほしい。第5・6問は、入試標準レベルの単語・熟語や表現を用いた長文読解問題である。空所補充問題、下線部の意味を問う問題、内容に関する質問、タイトル選択問題などが出題されている。1つの文章における語数はそれほど多くはないが、大問2題分の文章にそれぞれの理解度をはかる設問が付されているため、文章読解に慣れていない受験生は、制限時間内の解答に苦勞するだろう。単語や表現は概ね入試標準レベルではあるが、語注など読解のヒントとなる情報がないことを考慮すると、日ごろからある程度幅広い英語の文章に親しんでいるかどうか(英語を読む力)をはかる意図も見える。

●難易度

生きた口語表現が散見されるものの、総じて、大学入学共通テストと同等の難易度である。

英語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

全体的な難易度は概ね入試標準レベルであり、高等学校で習得すべき事項をマスターしたうえで、ある程度の入試問題演習を重ねつつ、日ごろから英語に触れる姿勢が求められている。つまり、60分という試験時間内で、相応の読解量と問題数を解くためには、確実な基礎力を土台とした入試問題演習と日常的な英語読解を行うことが必要である。

●高等学校の教科書や付随する問題集などを活用し、既習事項を完璧にしておこう

日常で英語に触れる機会はもちろん大切だが、高等学校で学んだことを完璧に習得しておくことが、大学入試に臨むうえで必要不可欠である。第1・2問では、まれに教科書などでは触れることのなさそうな表現が用いられることもあるが、そのような場合であっても、教科書レベルの知識を活用することによって正解できるように作問されている。たとえ「英語」が得意であったとしても、単語や表現の知識に偏っていることも多い。大学入試に向けた第一歩として、今までに使った文法のテキストをもう一度復習し、英語を組み立てるために必要なルール（文法）をしっかりと理解することから始めるべきである。

●単語・熟語や表現は、意味と文法の2方向からアプローチして覚えよう

広告などを用いた第4問や語注の付されていない第5・6問では、教科書では見慣れないけれど日常的に使用される単語や表現も使われている。入試応用レベルの知識を習得することまではしなくてもよいが、単語・熟語や表現を覚えるときに、文法面からのアプローチも入れるように意識するとよい。例えば、「go on ~ing」という表現を覚える場合、「~し続ける」という意味だけでなく、「go」と「on」の意味や使い方も辞書で調べ、動名詞の役割も含めたい。それぞれの単語が「~し続ける」という意味をどのように作り上げているのかを確認すると、単に意味を知っていることだけにとどまらず、他の「go」や「on」を用いた表現の理解にもつながる。漢字の成り立ちと同じように、表現の成り立ちを文法から見つめなおすことで、教科書では見かけない表現の把握にも役立つだろう。

●日常生活の中で英語に触れる時間を設けよう

高等学校の既習事項をマスターし、英語の学習における工夫を凝らすことで、未知の表現にも対処できる力を養うことはできる。しかしながら、表現に触れたことがあるかないかというだけで、問題の解きやすさが違ってくるといっても事実である。さらに、第3問の長めの会話文と第5・6問の2つの文章を60分の制限時間内で読み下し、理解して解答しなければならないことを考えれば、英語の処理能力を上げておくことに越したことはないだろう。具体的には、勉強の隙間の時間で自分が興味のある情報に関する英語の文章を読んでみる、寝起きの頭を起こすために英語の音声の後に続けて発音してみる、その日に学んだ単語や表現を使って3行日記を英語でつけてみるなど、無理なく英語に触れる機会を設けてみるとよいだろう。特に、音声を使った活動は、音声の速さで強制的に英語を処理することになるので、処理能力も向上しやすい。お気に入りの音声や動画をいくつかストックしておき、気分転換に聞いたり見たりすることから始めると自分だけの習慣が身につくだろう。

●まずは一度過去問を解いて、今の自分の力を知り、受験勉強の計画と対策を立てよう

たとえ目標が定まっていたとしても、今の自分の立ち位置（力）がわからなければ、目標までの距離や道のりはぼんやりしたままだろう。効率よく対策を立てるためにも、実際に出題された問題を入試と同じ制限時間で一度は解いてみて、具体的に今の自分が「できること」と「できないこと」をよく知ることから始めるべきである。過去問演習という、正答率や得点に注目しがちであるが、その前提となる「どのような知識や能力が足りずに正解を選ぶことができないのか」という分析をきちんと行うことが大切である。「敵を知ることによって自分自身を知り、そうすればどのような戦いにおいても勝利をすることができる」という言葉があるように、過去問を解いてみることで自分の実力を分析する姿勢を身につけよう。これから始まる受験生生活において、一つひとつの演習で自分の「できること」と「できないこと」を分析し、「できないこと」を「できること」に変えていくことで確実に成長できる。前述のアドバイスを踏まえて自分の計画を立て実践を積み重ねて、確実な合格力を身につけてほしい。